

宗密教学における「知」の概念と論理

胡 建 明

一 はじめに

本論は、華嚴宗五祖であり、荷沢禪の法統をも伝承している中唐時代の圭峯宗密（七八〇～八四二）の思想の中で、キーワードの一つである「知」について、その概念、そして哲学的思索と思想的位置づけなどについて論究したいと思う。

宗密は、従来の華嚴教学の轍を改めるほどの一大革命を起こした。というのも、彼は『華嚴經』よりも、もはや『円覚經』を所依の經典とし、その注釈に全力を注ぎ、「本覚妙心」、「靈知不昧」という本源的な「一心」、絶対的な「知」を思想の中核とし、第一義として高揚したからである。そして華嚴・円覚という「一乘顯性教」に説かれた本源の「無住の心体」と、荷沢禪が鼓吹する絶対的な「知」（寂知）と、儒・道二教及び仏教諸宗を、全掇全収の立場で宗趣を明らかにした。

「知の一字、衆妙の門」という言葉の出处は、澄観の『華嚴經疏』、『演義鈔』⁽¹⁾によると、荷沢神会の言葉として見られ

るが、しかし、宗密はこの一句を最大に用いたのである。

概して言えば、彼が『原人論』で主張した儒道兼容、仏教優位の思想体系、そして『禪源諸詮集都序』で行った禪相判釈と、そこで力説した教禪一致論も、皆この本源的な心体と等しい「知」を根底としたものに違いない。

本論は、宗密の絶対的な心体という恒常的、根本的、実在的な「知」を軸とし、その概念と論理について論じてみたい。

二 「知」の概念と論理

宗密の教判方法については、よく「全掇全収」と言われる。しかも、常に「全掇」した上で、「全収」という統合的な方向に完結するものである。⁽²⁾つまり、教の優劣、深淺、權実、偏円、頓漸、了義不了義などへの拵び分け、低次元から高次元まで逐一に論ずるのが、最終的に自分が標榜する華嚴・円覚という究極の「一乘顯性教」と荷沢禪の「直顯心性宗」によって網羅し、帰着するのが目的である。それは、宗密教学

宗密教学における「知」の概念と論理（胡）

の一貫した論法である。彼によって構築された本来成仏論、教禅一致論や三教会通論などの総合哲学は、すべてこのような方法論によるものに他ならない。

法蔵の教学は、あくまでも限りなく果上現的な華嚴別教一乗を謳歌するが、宗密は、これと異なつて、実践的な態度をとり、果位の仏よりも、専ら因地の衆生に重点を置き、その根源性、一致性を強調するのである。「知」の概念と論理についても、そのような思弁に展開されたものである。

まず、宗密の著書から論ぜられる「知」の概念とその論理を確認してみたい。

（一）「知」と「智」の不同

宗密以前は、字義としての「知」と「智」との区別は、それほどはつきり意識されたものではなく、例えば「慧」と「恵」と同じように、お互いに兼用した。また、語彙としての「智慧」では、「智恵」とも、「知恵」とも、多くの仏教典籍で通用してきた。これを厳格に概念化したのは宗密であろう。なぜ宗密がそうしなければならなかったのか、それは、彼の教学の中核的な心性論、とりわけ本来成仏論との関連が大きいからである。すなわち、「知」の一字、衆妙の門であり、この衆妙の門は、「知」の一字をキー（鍵）として、一切の衆生、悉く皆成仏の門を開かせしめるのである。

それについて、『禪源諸詮集都序』巻下では、

真智真知異者、空宗以分別為知、無分別為智、智深知淺。性宗以能証聖理之妙慧為智、以該於理智、通於凡聖之靈性為知、知通智局。』（大正四八・四〇六中）

また、『円覚經大疏』巻上の一では、

無相宗說一切法皆無自性、即是真如。如能了此者、即名真智。（中略）法性宗則明自性清淨、常住真心、方是實理。故論出真如体云、唯是一心、一心真実、本自能知、通於理智、徹於染淨。（統藏一 一四一・一一五下）

とある文で、宗密は、空宗、無相宗（教は三論宗、禪は牛頭宗）と性宗、法性宗（教は華嚴宗、禪は荷沢宗）両者の「知」と「智」についての異なりを比較する。前者が聖賢の所証の「智」へ偏りに指摘し、後者は「一心真実」「凡（因位、在纏法身）聖（証果）の靈性に通ずる」「染（相）淨（性）に徹する」という実在的、根源的な真如の体として、この「知」を強調している。つまり、宗密が最も重要視するのは、狭義的な所証の智（離垢清淨）よりも、むしろ広義的な衆生本来成仏の能証の知（自性清淨）である。この「知」は、如来蔵であり、本来成仏の本因である。いわゆる『起信論』⁽³⁾に説かれる「衆生の一心」、その「一心」は染（心生滅門）、淨（心真如門）を有する方法の源である。その経証としては、宗密は、『華嚴經』の「問明品」⁽⁴⁾に依拠している。

(二)「知」は達摩所伝の心

宗密は、有宗（法相宗）においては、識を以て心と為し、空宗（無相宗）は一切寂滅の空を以て心と為しているため、皆一分の真理を有するが、本来なる心源の知には、至つてな^いと指摘している。達摩から六代、荷沢に伝えて来た「以心伝心」の禅こそが、即ちその真性として「知」（靈知）であると主張している。

『禅源諸詮集都序』巻上では、

破相之党但云寂滅、不許真知、說相之家執凡異聖、不許即仏。（中略）達摩善巧、揀文伝心、標舉其名、心是名也。默示其体、知是体也。（中略）不与他先言知字、直待他自悟、方驗真実、是親証其体、然後印之、令絶餘疑。故云默伝心印、所言默者、唯默知字、非総不言。六代相伝、皆如此也。至荷沢時、他宗競播、欲求默契、不遇機縁、又思惟達摩懸系之記、達摩云、我法第六代後、命如懸系也。恐宗旨滅絶、遂明言知之一字、衆妙之門。（大正四八・四〇五中）

『禅源諸詮集都序』巻下では、

以心伝嗣唯達摩宗、心是法源、何法不備。所修禅行似局一門、所伝心宗実通三学。（大正四八・四一二下）

と論じている。伝心の心とは、即ち知であるということについて、達摩と六代祖師が、「默示」して単伝したが、荷沢神会が時代に即応して、「明言」をしなければならなかったと宗密が解釈しているのである。又、その所伝する「心宗」は、戒定慧の三学にも通ずるものであるという教禅一致論に結び付けた。

宗密教学における「知」の概念と論理（胡）

また、『中華伝心地禅門師資承襲図』では、

荷沢宗者、（中略）謂諸法如夢、諸聖同説。故妄念本寂、塵境本空。空寂之心、靈知不昧。即此空寂寂知、是前達摩所伝空寂心也。任迷任悟、心本自知。不藉縁生、不因境記。迷時煩惱亦知、知非煩惱、悟時神變亦知、知非神變。然知之一字衆妙之源。（続蔵一・二一・一五・五・四三六下）

と論じている。ここでは、知が無住の心体であり、常住不変の故に、迷悟に属せずにして、絶待的な実在であり、生仏の心源でもあると定義している。

(三)「知」は有情（有知、有心）成仏のみとしての靈知

宗密は、「知」の一字を以て、すべての有知者（有情衆生）が菩提涅槃（本来成仏）になる絶待的理と看做したが、しかし、その「知」は、無情（非情）成仏論の根拠にもなるのかどうかは、宗密哲学に看過できない重要な命題であろう。この非情成仏については、既に鎌田茂雄博士の著述において、淨影寺慧遠から吉蔵、神会、智儼、法蔵、湛然、澄観などに至るまでの思想的な関連が論究されていたが、しかし、宗密に対しては、論及されていなかったようである。周知のように、澄観は、荊溪湛然の「非情成仏説」の影響をうけて、伝統的華嚴教学における「非情無仏性説」を保有しながらも、無情にも覚性（成仏の可能性）を認めたことが窺えたのである。私見では、このような「二説併存型」は、どうやら弟子の宗

宗密教学における「知」の概念と論理（胡）

密には忠実に受け継がれていなかったようである。彼は、涅槃經説に基づく法蔵の「開覺仏性、唯局有情」と荷沢神会の「非情者、無仏性」⁽⁶⁾という祖説を継承した。それは彼の「知」の概念と論理について、重要なポイントとして注目すべきものである。知は諸仏万徳の源としての「仏性」⁽⁷⁾であり、また万法の源としての「法性」でもあるという持論からみれば、一見にして、法性イコール仏性であるという傾向が彼にもあるのではないかと感じ取れるが、しかし、彼の著述の中では、はつきり「有情成仏論」のみを唱えているようである。

『円覚經大疏鈔』卷一の上では、

覺有能知之心、不屬諸物。常自能知、雖似覺相、亦不名円。（統藏一）一四）三・二二三上）

『中華伝心地禅門師資承襲図』では、

今就剋体指示、即愚智善惡、乃至禽畜、心性皆然、了了常知、異於木石、其覺智等言、即不通一切。（統藏一）二）一五）五・四三七上）

『禅源諸詮集都序』卷上では、

問、上既云、性自了了常知、何須諸仏開示。答、此言知者、不是証知、意說眞性不同虚空木石、故云知也。（大正四八・四〇四下）四〇五上）

『円覚經略疏註』卷上一では、

法界性与如来藏体同義別、別有其二。一者在有情数中、名如来藏。

在非情数中、名法界性。如智論明仏性法性之異。二者謂法界則情器交徹、心境不分。如来藏即但語諸仏衆生清浄本源心体。如云能造善惡、能起厭求。就法界言、即無斯義。掘此則藏心克就根源、界性混其本末。混則普該之義、易信。克則周遍之理、難明。故指藏心如法界性、亦乃撰其二義之別、歸於一体之同、方顯覺妄因依、誠非究竟円実。（大正三九・五三五下）五三六上）

また、同疏卷下では、

色心不二、凡聖無差、皆依覺性、故同平等。智論云、在衆生数中名仏性、在非衆生数中名爲法性。上皆所稱之性也。（大正三九・五五七中）下）

とある文で、宗密は、大智度論から引用して、靈知（仏性、如来藏）は能知、能起、能証の有情（衆生）の中にあるのみに規定し、法（界）性は、内外情非情に通ずるものであるが、非情には能知性（真心覺知）がなく、所知性の仏性（法性）にすぎない。それ故、色（境）心（知）は体としては不二であるけれども、その義（用）は異なるため、非情成仏ができないと否定的である。宗密は、インド仏教思想を積極的に中国思想へ変容する立役者の一人とはいえ、「有情成仏論」のみは、伝統的な見地を示しているのは何故であろうか。それをよく深く考えてみると、宗密の本音としては、有情衆生（六道）の中で、靈知の開示悟入ができる人間こそにあるというのであろう。それ故、宗密にとって本当の狙いは、「人間成仏論」であり、彼の「原人論」（『華嚴原人論』）、「孝論」（『孟蘭盆經疏』）

そして円覚經の「本来成仏論」などは、視線を熱く人間に注いだのである。明かに仏教よりも、むしろ儒教的な「人間主義」といえよう。また、荷沢神会から四伝の法孫と自負する宗密は、神会の「有情成仏論」の牙城を守り切るという意識は、澄観より遥かに強かったものに違いないであろう。

三 結び

上述したように、宗密は、この「知」の一字を以て、彼の教学のすべてとして一貫して、知のピラミットの頂点から、儒道ないし仏教諸宗の教説を凌駕して包摂しようとした。「知」の哲学は、もはや宗密哲学（認識論と実践論）の代名詞のようなものと言えよう。勿論、それを濫觴し始めたのが、荷沢神会、清涼澄観であったが、しかし、それを無限大に發揮していたのが宗密であった。「知」の思想は、後の中国思想史上に莫大な影響を与え、仏教のみならず、特に宋明儒学の「知行論」とりわけ朱熹、陸象山の「心学」、王陽明の「良知説」などに強く刺戟を与えたのである。また、ヒューマニズム（人間主義）と中心する近現代中国仏教にも、なお宗密の「知」の哲学は生きているのではないかと思わせる。その辺りについての考察は、紙面上の関係で、今後に譲りたい。

1 『演義鈔』第三四卷（大正三六・二六二上）には、「水南善知

宗密教学における「知」の概念と論理（胡）

識云、即体之用名知、即用之体為寂。如即燈之時是光、即光之時即燈。燈為体、光為用、無二而二也。知之一字、衆妙之門、亦是水南之言也。」また、『華嚴經疏』第一五卷（大正三五・六一下）には、「故仏開示皆令悟入、即体之用。故問之以知、即用之体、故答以性淨。知之一字、衆妙之門」とある。

2 『禪源諸詮集都序』卷上（大正四八・四〇五下）には、「以一心心性對染淨諸法、全揀全収。全揀者、如上所説、但剋体直指靈知即是心性、餘皆虛妄。（中略）全収者、染淨諸法、無不是心。（中略）」とある。

3 『起信論』（大正三二・五七五下）には、「所言法者、謂衆生心。是心則攝一切世間法出世間法、依於此心、顯示摩訶衍義。何以故、是心真如相即示摩訶衍体故、是心生滅因緣相能示摩訶衍自体相用故。」と「依一心法有二種門、云何為二、一者心真如門、二者心生滅門。是二種門皆各攝一切法。」とある。

4 『華嚴經・問明品』（大正一〇・六九上）に参照。

5 鎌田茂雄の『中国華嚴思想史の研究』第四章・第三節・四三四～四五五に参照。東大出版社、一九六五年三月。

6 上掲書四四五、四三六～四三七に参照。

7 『禪源諸詮集都序』卷上（大正四八・三九九上～中）には、「況此真性非唯是禪門之源、亦是万法之源、故名法性。亦是衆生迷悟之源、故名如来藏識出楞伽經。亦是諸仏万德之源、故名仏性出涅槃等經。」云々。

〈キーワード〉 中唐、宗密、知、心性論、華嚴教学、荷沢禪、全揀全収、有情成仏論

（中国人民大学哲学院博士後期課程・駒澤大学仏教経済研究所

研究員・博士（文学）